

学習者の滞日中における「聞き手発話」の変化

藤井 桂子

[キーワード] 聞き手発話、あいづち、先取り応答、先取り完結、繰り返し

1. はじめに

海外で日本語を学んでいた学習者が、日本に一定期間滞在することにより、不自然だった会話が円滑に行えるようになる場合が少なくない。大塚（2001）は「～けど」「～ので」などで終了する中途終了文などの「聞き手への働きかけ発話」が増加し、日本人のパターンに近づくことが会話に自然さを増した要因のひとつとなっていることを報告している。本稿では、滞日中に学習者の発話において何が変化したのかを、「聞き手からの発話」に焦点を当て、台湾からの短期留学生の会話データから分析する。ここでいう「聞き手からの発話（以下「聞き手発話」と呼ぶ）」とは、会話の中で、話し手の地位を脅かすことなくなされる聞き手からの言語的な反応を指す。本稿では、「あいづち」「先取り発話」「繰り返し」を取り上げる。

日本語の会話における「聞き手発話」の重要性については、これまで多くの研究（水谷1984、松田1988、堀口1991他）で明かにされている。「聞き手の理解を示し話の進行を促すもの（水谷1984）」として機能し、会話の中で欠かせないものである。「聞き手発話」は、日本語に限らず、他の言語においても存在するものである。しかし、どの言語でも同じように現れるものではなく、文化によって相違があり、その機能や解釈も異なる（Tannen1984）。Clancy et al. (1996)では、出現のタイプや頻度あるいは出現箇所などについて期待されるものも異なってくる文化的なストラテジーであると指摘されている。学習者は日本に滞在することにより、母語のスタイルとは異なる日本語の「聞き手発話」のストラテジーを習得し、会話能力を発達させているのであろうか。

日本語の学習者のあいづち習得に関する研究分野では、初級学習者を対象とした登里（1994）のほか、レベルの違う学習者の比較から習得の過程を研究した渡辺（1994）、また上級の学習者の聞き手行動を分析した堀口（1990）があるが、同じ母語を持つ同一の中上級の学習者を対象とした縦断的な研究はほとんど見られないようである。本研究では台湾から来日した中上級レベルの学習者9名の「聞き手発話」の実際の変化を、来日直後と5か月後に収録した会話データをもとに、日本語母語話者の場合と比較し、会話の上達との関連を探る。

2. 実験と分析の方法

2-1 データの収集

台湾からの短期留学生9名（L1～L9）に対して来日直後と5か月後の2回、日本語母語話者1名（すべてのデータについて同一の人物JN：30代女性）との1対1の話し合いの場面を設定し、録音、文字化を行った。1回目は食事会の場所を決める、2回目はゼミの合宿先を決めることを想定した話し合いである。同様の設定で日本語母語話者10名（学習者と同世代で首都圏在住の大学生J1～J10）に対し、データの収録を行った。データの収集ではそれぞれのデータの変数を抑えるため、被験者の国籍、年齢層、相手の話者、トピックなどをコントロールし会話場面ができるだけ共通になるようにした。（表1参照）

<表1>

学習者	国籍	母語	性別	年齢	1回目	2回目	日本人	国籍	母語	性別	年齢	時間
L1	台湾	中国語	女	20	4'54"	5'14"	J1	日本	日本語	男	22	4'24"
L2	台湾	中国語	女	20	8'10"	9'40"	J2	日本	日本語	男	20	4'06"
L3	台湾	中国語	女	21	3'23"	6'00"	J3	日本	日本語	女	21	4'29"
L4	台湾	中国語	男	20	5'04"	6'49"	J4	日本	日本語	女	21	4'51"
L5	台湾	中国語	女	21	14'15"	8'19"	J5	日本	日本語	女	19	5'23"
L6	台湾	中国語	男	21	9'50"	4'00"	J6	日本	日本語	男	20	6'11"
L7	台湾	中国語	男	22	6'52"	7'11"	J7	日本	日本語	男	20	10'47"
L8	台湾	中国語	女	21	7'10"	7'00"	J8	日本	日本語	女	18	9'07"
L9	台湾	中国語	女	20	4'47"	7'35"	J9	日本	日本語	女	21	5'24"
							J10	日本	日本語	女	21	5'15"

2-2 分析の観点

本稿では「聞き手発話」を日本語母語話者が持つ会話参加へのストラテジーと見なし、聞き手発話における「あいづち」「先取り発話」「繰り返し」の出現について、学習者の変化を日本語母語話者の場合と比較しながら分析する。

「あいづち」についての多くの研究があるが、その定義は必ずしも一定ではない。ここでは、話し手の地位をおびやかさず、聞き手として発する「うん、ふーん、ああ、はい、そうですか、そうですね、なるほど」などのいわゆるあいづち詞を「あいづち」と呼ぶこととする。話し手の発話終了直後に相手から発せられるあいづち詞もあいづちに含める。話し手の質問「学生ですか」に対する「はい」のような応答、また、笑い、繰り返し、考え中を示す「んー、あの」などはあいづちには含めない。なお、「はいはいはい」「はい、そうです」など連続して現れるものはひとつのあいづちと見なした。

「先取り発話（先取り）」については「先取り応答」と「先取り完成」の2つに分類した。「先取り応答」とは、以下の例のように話し手の発話が完了しない時点で先の部分を予測して早いタイミング行われる応答を指す。話し手の発話と重なる場合もある。

<例1>

JN：沖縄でなければ なんでも [いいん [：発話の重なり開始箇所
→ L4： [いや →：説明に該当する発話
JN：ですか？（笑い）

<例2>

JN：じゃあ箱根ーでー
→ L8：はい、はい箱根
JN：決めましょう
L8：んー

<例3>

JN：みなでこうお話しが [たくさん
→ L4： [そうですね
JN：できそうですね

L 4 : そうですね

「先取り完結」は、話し手の発話の続きを予測して聞き手がその部分を完成させるような発話を指す。話し手の発話と重なる場合もある。

<例 4>

J N : でも海があるから

J 9 : あー

J N : うまくすれば

ー J 9 : 泳ぐことも [できる

J N : [泳いだり、おいしいものが食べられたり・・・

<例 5>

L 7 : 昼食と夕食が [付いていますね

J N : [そう、両方付いてますよねー、でー、一応ゼミ合宿なので一勉強することを考えるとー

ー L 7 : こっちの方がいいと思います。

これらは、話し手への理解や共感をより積極的に示す機能を持ち、相手との連帯感の形成に寄与する働きがある。次に、ここで取り上げる「繰り返し」は、話し手の発話の一部または全体の繰り返しのうち、相手への理解、共感に基づく判断できるもので、先取り発話と同じような機能を持つ。意味がわからないために繰り返されたような発話は含めない。

<例 6>

J N : 値段も比較的手頃 [ー

ー J 7 : [手頃で [すねえ

J N : [ですねえ

J 7 : ええ

<例 7>

J N : とくに女性に [人気

ー L 5 : [あ、女性に人気

J N : ありますけど、で、そうですね

<例 8>

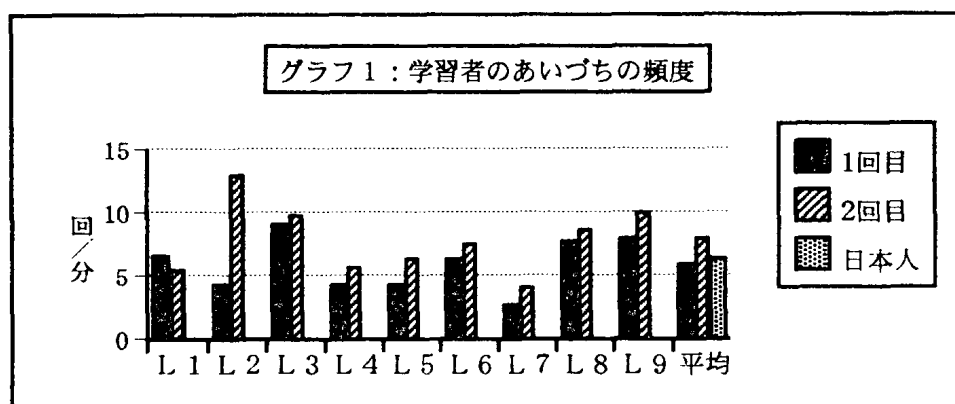
L 1 : わたしたちにとってちょっとね (笑い)

JN: つまらない [かもしれないですしね
 - L1: [うんつまらないかもしれないです。

3. 分析の結果と考察

3-1 学習者のあいづちの変化

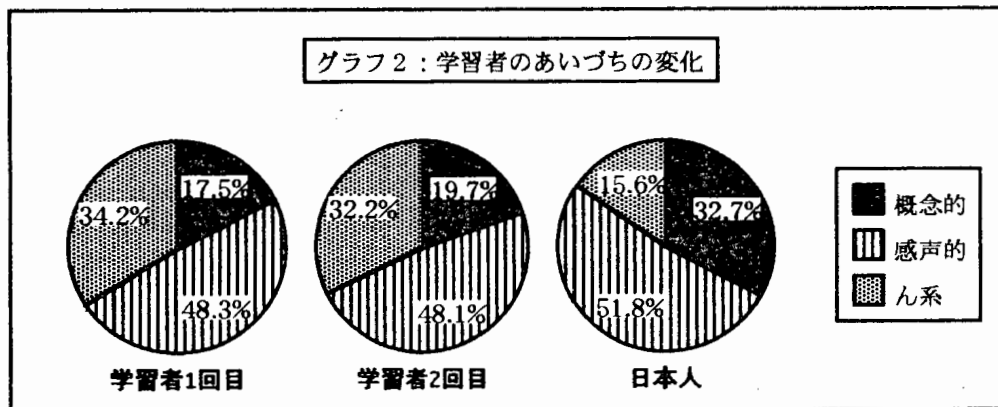
まず、あいづちの頻度について見る。〈グラフ1〉は1分あたりに現れるあいづちの数を表わしたものである。グラフの右の端には、日本語母語話者（日本人）10人の平均値を示した。学習者9名の平均値で見ると、来日直後においても日本人の平均値に近い値を示していることがわかる。また、5か月後の結果では、L1を除く、すべての学習者のあいづちの頻度が高くなっている。平均値では日本人の平均を上回る結果となっている。先行研究（劉1987、Clancy et al. 1996、楊1997）で報告されているように、中国人母語話者の会話ではあいづちが日本人のあいづちに比べかなり少ないのであれば、この学習者達は、あいづちを打つというストラテジーについては、台湾での日本語の学習の中で既にある程度習得してきていることになる。



あいづちの頻度が増加したのは、学習者が「聞き手発話」の総頻度がはるかに高い日本語母語話者のスタイルを取り入れたためであると考えられる。このあとの項で見るように、先取り完結についても増加が見られるが、日本人であれば先取り完結を用いるような箇所においても、より単純なあいづちを多く使い、結果的にその頻度が日本人以上に増えていると考えられる。

次にあいづちの内容について見る。ここでは、登里（1994）が用いた「概念

「概念的あいづち」「感声的あいづち」の分類に「ン系のあいづち」を加え、あいづちを3つに分けてその出現率を比較する。「概念的あいづち」とは、「そうですか、そうですね、なるほど、ほんと」など概念を持つ表現を含むあいづちを指す。「感声的あいづち」とは、「はー、はい、あー、えー、んー」などの音声だけを用いたあいづちを指す。感声的あいづちのうち、中国語のあいづち音にも近い「ン系のあいづち」をさらに区別した。

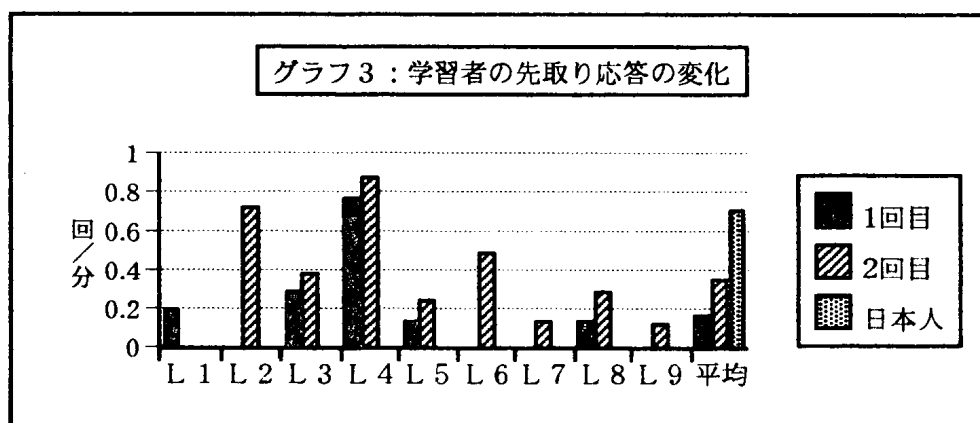


グラフ2に示すように、全体の平均で1回目、2回目とも構成比はあまり違いがなく、日本人に比べ、ン系のあいづちが圧倒的に多く、概念系のあいづちが少ない。しかし、わずかではあるが、2回目には、そうですねなどの概念系のあいづちの増加が見られ、一方ン系のあいづちは減少している。個別の変化で見ると、2回目に9名中6名の学習者に「そうですか、そうですね」というソウ系のあいづちの増加が見られ、会話の文字化資料からも、目につく変化になっている。三井（1994）の報告では、学習者の会話の自然さの要素の一つとしてこれら「そうですか、そうですね」のあいづちを使用してる点が指摘されている。ソウ系の増加は会話の自然さに寄与するものと考えられる。ただし、日本人に見られる「そうですよね」を使用した学習者はいなかった。

あいづちの種類は平均で1回目が7.3種類2回目が9.0種類で、日本人平均の8.2種類より数値が上がっている。学習者で2回目に増えたものとしてはソウ系のあいづちと「うん、ふーん、へー」などである。「うん、ふーん、へー」は今回日本人のデータではほとんど見られない。使用場面の使い分けは十分できないものの、くだけた言語表現が学習者の滞日中に習得されていることを示唆している。

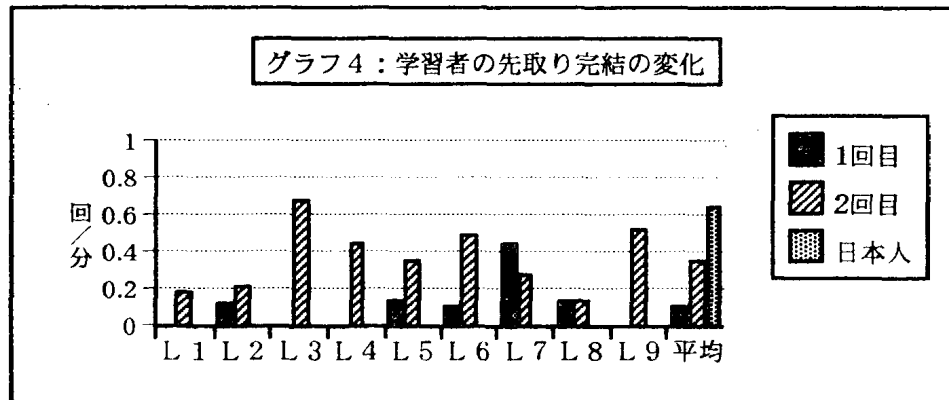
3-2 先取り発話（先取り）

まず「先取り応答」の結果を見ると、グラフ3に示すようにL1をのぞく8名すべてに増加が見られる。8名のうちL2、L6、L7、L9は、来日当初の1回目のデータでは先取り応答がゼロであったが、2回目には先取り応答が見られるようになった。平均では、0.17回から0.36回に増加しているが、日本人の平均0.71回に比べると約半分の数値である。



「先取り完結」は、グラフ4のような結果になった。L7が減少、L8が同数であるが、他の7名は、増加している。L1、L3、L4、L9は、ゼロからの増加となっている。1回目に「先取り応答」がある程度出現している学習者は「先取り完結」の伸びが大きい傾向が見られた。「先取り応答」の方が習得されやすい傾向にあることが示唆される。平均では、0.11から0.36へと増加し、日本人の平均0.64回に近づいている。

「先取り発話」の数値の伸びは、全体として学習者が日本人の「先取り応答」や「先取り完結」、タイミングの取り方に慣れ、聞き手のストラテジーとして「先取り発話」を習得していていることを示していると考えられる。



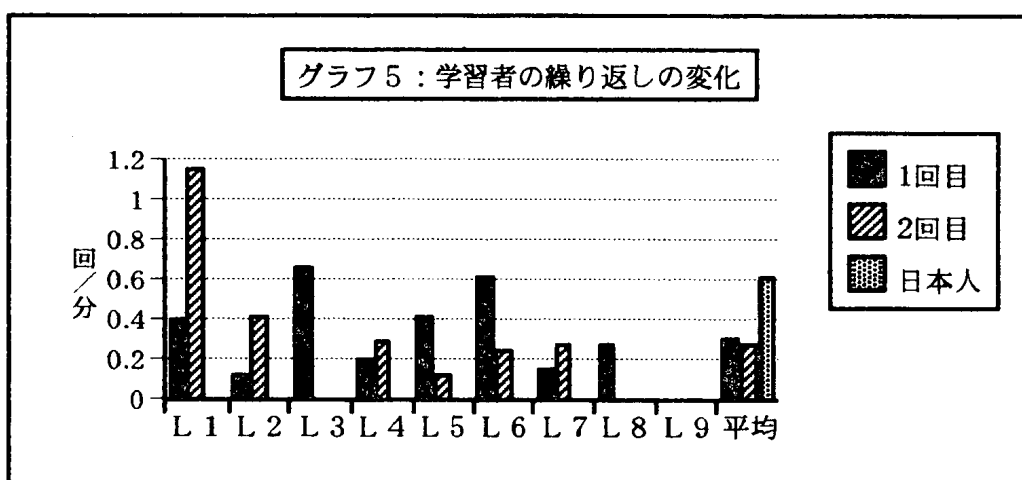
ところで日本人の個々のデータをグラフ（グラフ6参照）に並べて気がつくのは、「先取り応答」の数値が高い人は「先度り完結」の数値が低いという相補うような関係が見られることである。学習者にも日本人ほどではないが、このような傾向が見られる。そこで、学習者の変化を先取り応答と先取り完結を合計した数値で見ると、L 1がほぼ同数、L 7がわずかに減少し、他の7名は増加していることがわかる。L 7については、来日後台湾へ帰国している期間があり、その影響で、数値が他の学習者のように伸びず、2回目の数値でも最も低い数値に留まったことが考えられる。L 1の場合は他の学習者と異なり、「先取り発話」ではなく「繰り返し」というストラテジーを多用していることが、次の「繰り返し」の変化からわかった。

3-3 繰り返しの出現頻度

「繰り返し」のグラフ5を見ると、まず1回目にL 9以外の学習者全員に繰り返しが出現していることがわかる。水野（1988）では、中国人の会話場面における「おうむ返し」をあいづちの主な表現としてとらえており、また楊（1997）は、中国語母語話者同士の会話ではあいづちとしての「繰り返し」が多く、母語でこの繰り返しが多用している人が日本人との日本語の会話場面でもこれを多用していると述べている。これらは「繰り返し」全般が中国語母語話者にとって、比較的習得しやすいものであることを示していると言えよう。

次に頻度の変化を見ると、減少が見られる学習者と増加が見られる学習者と繰り返しが見られない学習者がいる。また、平均値では、先取りとは逆に2回目

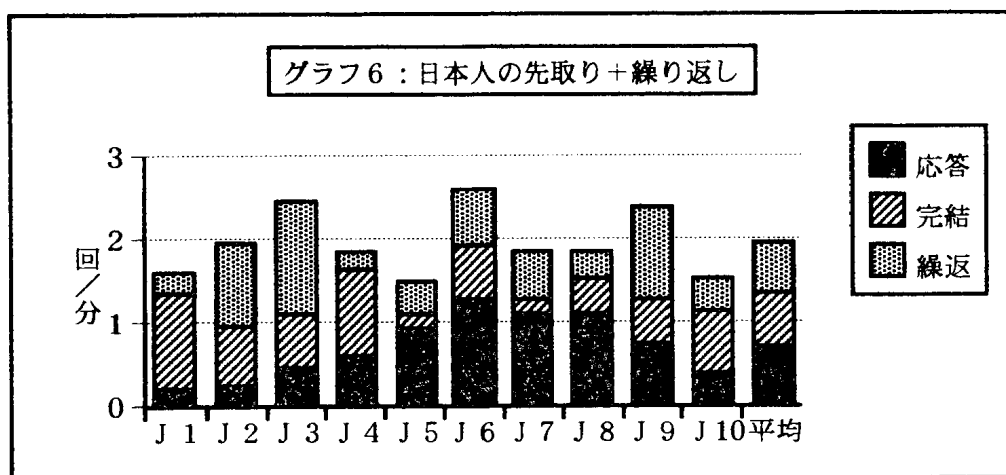
の方が低い数値になっており、一見ただけでは全体的な特徴をつかみにくい。しかし、ここで注目されるのは、先取り発話において他と異なる変化を見せていたL1において、「繰り返し」の数値が大きく伸びていることである。つまり、L1は「先取り発話」では、1回目の数値も2回目の数値も低く、応答と完結の合計頻度に増加が全く見られないままであったが、少なくとも「繰り返し」というストラテジーについては習得が進んでいることがわかる。L1の場合、先取り発話に替えて、繰り返しを用いていると見ることができる。他の学習者においても、先取り発話を使わず、繰り返しを用いている場合があることが考えられる。



そこで「先取り発話」と「繰り返し」の出現を合わせてみると（グラフ7参照）、2回目の数値が最も低かったL8を除く全員に伸びが見られ、平均では1分あたり、0.58回から1.01回に増加し、日本人平均の1.96回に近づいていた。また、その内訳を見ると1回目の繰り返しの数値が減少し、それに替えて2回目に先取り発話の数値が伸びるという傾向が見られた。1回目には繰り返しというストラテジーで応じていたものが2回目にはタイミングを早めたより積極的な先取り発話へと移行していった学習者が多かったと言える。繰り返しが増加しているL2、L4の場合も、相対的な割合では先取り発話の伸びが大きい。

ここであらためて、グラフ6から「繰り返し」と「先取り発話」の関係をみると、日本人の場合、「先取り応答」と「先取り完結」の関係と同じように、それぞれが相補うように出現する傾向が見られた。「先取り発話」の数値が低い日

本人は「繰り返し」の数値が高く、逆に、「先取り発話」が多い日本人は「繰り返し」が少なくなる傾向が見られるのである。つまり「聞き手発話」が期待される箇所で、日本人は「先取り応答」か「先取り完結」かあるいは「繰り返し」かいずれかのひとつを選択し会話を進めていることとなる。したがって、日本人の場合、個別に見るとばらばらに現れる個人的な傾向が、先取り応答、先取り完結、繰り返しと足していくに従って個人差が小さくなっていることがわかる。

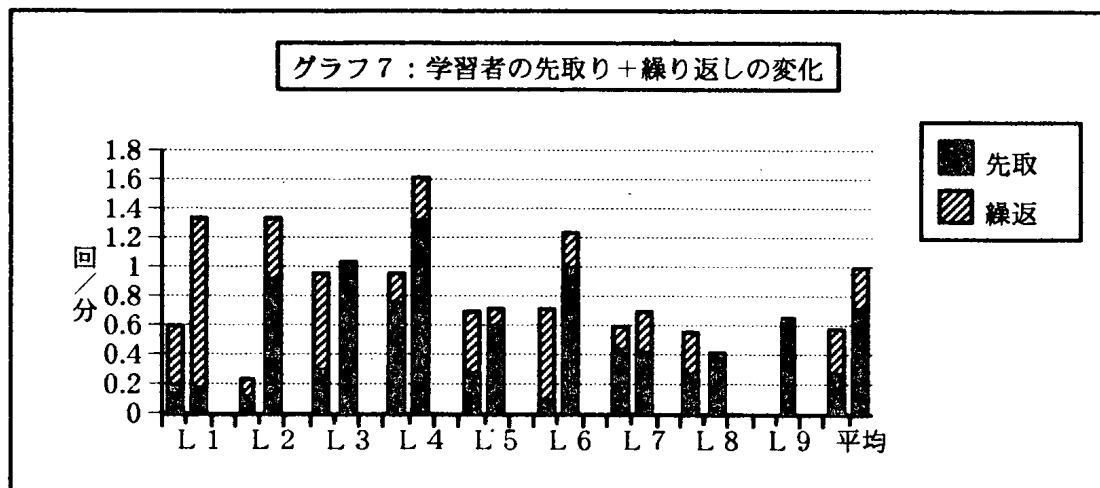


一方、学習者においては、「先取り発話」と「繰り返し」を合計した数字が次に述べる会話能力の評価との関係で大きな意味を持つことがわかった。

4. 聞き手発話の頻度と授業評価の相関

本研究とは全く別に行われた会話授業の学期末の評価と、同時期の2回目の学習者の「聞き手発話」の関係を見た結果、先取り応答、先取り発話、繰り返しを合計した数値と「評価」との間に相関が見られた（相関係数プラス0.72）。即ち、先取り発話や繰り返しを多く用いる学習者ほど高い評価を得たことになる。先取り発話と繰り返しのストラテジーを習得することが会話の上達のひとつの要因となっていることがわかる。また、学習者は繰り返しのタイミングを一步進めて先取り完結へ変換していくような傾向が見られたが繰り返しのストラテジーも先取り発話と同様に有効であることが示唆された。L 1の他、途中帰国が入ったL 7は、先取り発話は減少したが、繰り返しの増加によって、総頻度は、L 8、L 9よりも高く、評価も高い。ここで取り上げた「繰り返し」は、単

純な相手発話の繰り返しではなく、相手発話への理解や、共感に基づく判断できるものであったから、先取り発話にかなり近いものであるといえる。L2の評価が低いのは、文法力の不足によると思われる。



棒グラフは各学習者の左が1回目右が2回目である。

評価（点数）はL1-92/ L2-85/L3-91/L4-93/L5-88/L6-90/L7-87/L8-84/L9-84であった。

一方、あいづちについては、緩やかであるが負の相関が見られた（相関係数マイナス0.49）。おもしろいことに、あいづちが少ない学習者ほど高い評価を得ているという結果である。しかし、これはあいづちの使用が会話能力の評価を低くしているというよりも、聞き手発話としてより積極的な先取り発話のような反応が期待されるところで、先取り発話を用いずにあいづちで応じてしまった結果、あいづちの頻度が高くなり、評価との負の相関となって現れたと言える。今回のような中上級の学習者の場合、単純なあいづちだけではなく、先取り発話や繰り返しといったストラテジーの使用が期待されていることになる。また、このようなあいづちの頻度と評価との関係は、今回の学習者が一定の頻度のあいづちが打てる中上級レベルであったために言えることで、初級の学習者の場合にはあてはまるかどうかは明かではない。

5. まとめと今後の課題

台湾人学習者の「聞き手発話」の変化を調べ、日本語母語話者の「聞き手発話」の実態と比較した結果、次のことが明らかになった。

1. 滞日5か月の間に、あいづち、先取り応答、先取り完結の頻度が伸びを示した。
2. あいづちの変化で、会話能力の発達に寄与していると考えられるのは、「そうですね、そうですね」の増加である。
3. 聞き手発話の中で学習者の会話能力に対する評価と相関があったのは、先取り応答、先取り完結、繰り返しの合計頻度で、頻度が高い学習者ほど評価が高かった。逆に、あいづちでは、評価の低い学習者は、頻度が高く、負の相関が見られた。
4. 聞き手発話は、あいづち、繰り返し、先取り応答、先取り完結の順で、習得が進む傾向が見られた。
5. 日本人の「聞き手発話」は、先取り応答が少ない人は先取り完結が多く、また両者が少ない人は繰り返しが多いという、相補う関係で出現していた。

これらのことから、滞日中の学習者の会話の上達や円滑さには、日本人が用いる「聞き手発話」をストラテジーとして習得したことが一因となっていると結論付けられる。これらは、学習者の母語のスタイルと必ずしも一致するものではないかもしれないが、生の言語に触れ、テンポやタイミングをつかむことで大きく習得が進むのではないかと考えられる。1回目に先取り応答や先取り完結が全く出現していなかった学習者において2回目では出現が見られたことが、このことを裏付けているといえよう。また「聞き手発話」の習得と同時にその背景にある、相手に対する共感や一体感を積極的に示し一緒に会話を築いていこうとする「共話的」な話し方の習得が進んでいるということもでき、このことは大塚（2001）の「聞き手働きかけ発話」の増加とも一致するものである。今後は、会話相手の母語話者JNの1回目、2回目の発話の変化、母語話者同士の場合との相違を分析し学習者の「聞き手発話」の変化との関連を探るとともに、他の言語を母国語とする学習者の場合についても分析していきたい。

本稿で分析したデータは科学研究費補助金（基盤B）を受ける研究（代表者：水谷信子、課題番号：10480049）において収集したものの一部である。

参考文献

1. 堀口純子 1988「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育』61 (13-26)
2. 堀口純子 1990「上級学習者における聞き手としての言語行動」『日本語教育』71
3. 松田陽子 1988「対話の日本語教育学－あいづちに関連して－」『日本語学』12 (59-66)
4. 水谷信子 1984「日本語教育と話しことばの実態－あいづちの分析－」『金田一春彦博士古希記念論文集・2・言語編』(261-279) 三省堂
5. 水野義道 1988「中国語のあいづち」『日本語学』(18-23)
6. 三井豊子 1994「自然な話し方－オーストラリアの元交換留学生の場合－」『日本語教育』83 (121-135)
7. 中田智子 1992「会話の方策としてのくり返し」『国立国語研究所報告104 研究報告集13』(267-302)
8. 登里民子 1994「相づち習得の縦断的研究」お茶の水女子大学修士論文
9. 大塚純子 2001(発行予定)「日本語学習者の聞き手への働きかけ発話の変化」『明海大学別科10周年記念論集』
10. Patricia M. Clancy, Sandra A. Thompson, Ryoko Suzuki, Hngyin Tao 1996 "The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin" *Journal of pragmatics* 26: 355-387
11. 劉建華 1987「電話でのアイズチの頻度と中日比較」『月刊言語』11 (93-97)
12. Tannen, D. 1984 *Conversational Style: Analyzing talk among friends*. Norwood, N. J.: Ablex
13. 渡辺恵美子 1994「日本語学習者のあいづちの分析－電話での会話において使用された言語的あいづち－」『日本語教育』82 (110-122)
14. 揚 晶 1997「中国人学習者の日本語の相づち使用に見られる母語からの影響－形態、頻度、タイミングを中心に－」『言語文化と日本語教育』13 (117-128)
15. 揚 晶 1999「中・日両言語の相づちに関する一考察－頻度とその周辺－」『人間文化研究年報』23 お茶の水女子大学 (28-38)